顔の肌質感の自己評価と年齢の関係
The effects of age on the self-evaluation of facial skin conditions

○谿 雄祐[1]，飛谷 謙介[1]，村松 慎介[2]，小林 伸次[2]，長田 典子[1]
(1: 関西学院大学　2: 株式会社コーセー)
E-mail: tani.y@kwansei.ac.jp

1. 緒言

透明感やつや感などの肌質感は健康状態や魅力の判断において視覚的な手がかりとなる。そのため，我々は自他の顔の肌質感に対して注意を払い，肌質感の維持，向上のために日々の手入れを行っているが，とりわけ女性の肌質感に対する認識には年代間差がある。若年層が透明感を肌質感の中で最重要視するのに対し，中高年層は透明感よりも具体的な肌に関する悩みを重視する（征矢他, 2004)。

顔の素肌の肌質感に対する自己評価の年代間差の有無と，肌質感に対する認識の年代間差について検討するために，本研究では30代から60代までの一般女性を対象に調査を行った。

2. 方法

調査は，調査会社を介して募集した研究の目的を知らない一般女性41名（30代：10名，40代：10名，50代：11名，60代：10名）を対象に，昼光色の蛍光灯で照明された室内で行った。参加者は1名ずつ室内で調査に関する説明を受け同意書に署名した後に，自身の顔の素肌について，肌質感に関する11項目の良し悪しに関する認識を7段階で回答した。評価項目はすべての参加者に共通で，1.赤み，2.黄み，3.白さ，4.明るさ，5.透明感，6.色ムラ，7.くすみ，8.しわ，9.しみ，10.たるみ，11.毛穴であった。

3. 結果

年代ごとに各項目の評定値の平均と標準偏差を算出し，年代間差の有無について分散分析を行った。その結果，毛穴のみ5%水準で有意となったが，多重比較ではいずれの年代間の差も有意とはならず，自己評価の結果に年代間の差は見られなかった（図1)。

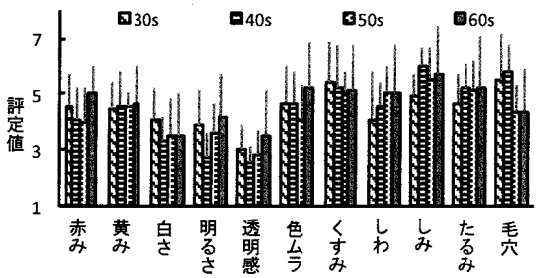

図1　年代ごとの評価項目平均

一方，評価項目間の相関には年代間の差が認められた。明るさは透明感と正の相関があるとされ(西牟田他, 2014)，いずれの年代においても相関係数は正であったが，その値にはばらつきが見られた。また，くすみは透明感と対となる要素(金子他, 1997)であるが，40代と50代では無相関であった。図2にすべての評価項目について，年代別に透明感との相関係数を示す。

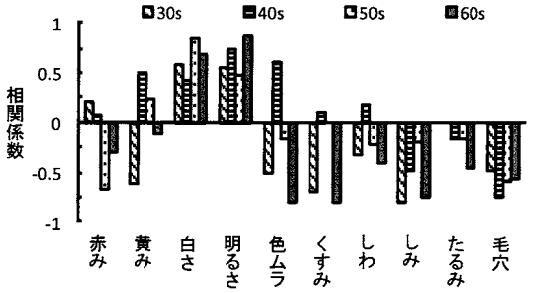

図2　透明感との相関(年代別)

4. 考察

顔の素肌の肌質感に対する自己評価結果は，11の評価項目すべてにおいて明確な年代間差が認められなかった。実際の肌状態は，加齢やその他の要因によって均質ではないと考えられるため，この結果は年代によって肌質感の評価の仕方が異なっていたことを示していると考えられる。

評価項目間の相関関係が年代によって異なっていたことは，肌質感を評価する上で重要な役割を担う肌質感に対する認識の年代間差の存在を示唆している。

5. 結言

本研究では，顔の素肌の肌質感に対する自己評価を30代から60代の一般女性に行わせ，その結果を比較した。評価項目ごとに分散分析を用いて年代間差の有意性を検討したところ，すべての評価項目において明確な年代間差は認められなかった。また，評価項目間の相関関係に年代間差が確認された。これらの結果は，肌質間に対する認識が年代によって異なっていたことを示唆している。

今後は，肌質感評価項目間の関係の分析と参加者の素肌画像の解析を通して，肌質感に対する認識構造の年代間差および類似性の解明を目指す。